

演題番号：E-17

演題名：動物愛護啓発事業の新たな方向性

－「動物にやさしい学校」づくりへの支援－

発表者氏名：○藤井 敬子¹⁾、川原 智佳子²⁾

発表者所属：1) 奈良県内吉野保 2) 奈良県三村小

1. はじめに： 子供たちの人格形成にとって、共感する力・感情移入できる感性の発育はとても大切な要素である。ここに動物を介在させることでその効果が飛躍的に上がることは、発達心理学の分野では広く知られている。動物愛護教育（以下動愛教育）の先進国である欧米では、これを継続的・計画的に授業に組み込み、大きな成果を上げているという報告がある（英国：RSPCA の教育システム・米国：HSUS の People & Animals 等）。そこで今回、1年間の授業の中で20時間程度の継続的なプログラムを実施、これを保健所が側面から支援する形で取り組みその効果を検討した。

2. 方法：〈対象〉 T 村立 M 小学校の 2 年生 9 名

〈期間〉平成 15 年 5 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日の間の概ね 20 時間

(1) 愛教育プログラムの提示 (2) 教育計画を作成

(3) 動愛教育を実施 (4) 評価

3. 成績：〈児童の成長〉 (1) 生命尊重の心の発達 (作文)

(2) 責任感・忍耐力の獲得 (夏休みの報告)

(3) 共感する力・感情移入できる感性の発達

(ロールプレイでの動物の代弁)

(4) 観察力・想像力の発達 (日常生活)

〈学校側の変化〉 (1) 命の教育への関心の高まり

(2) 動愛教育の有用性の認識

(3) 学校全体での取り組みの必要性の認識

4. 結論： 今回の取り組みで、継続的・計画的な動愛教育は子供の心の発達、とりわけ共感する力・感情移入できる感性の発達に有効であることが認められた。子供の心の荒廃が危惧される現代社会において、これらは教育の最も求められている部分であり、どの小学校でも取り組めるような、より標準的なプログラムへの改良と、これを支援するシステム作りが重要である。そのためには教育関係者、行政、獣医師、地域のボランティアなどとの連携が不可欠となる。また、このプログラムは視点を変えることで、「動物の福祉」・「人の責任」・「動物と環境」といった内容へ広めることが可能となり、最終的には「命の学習」としてトータルな動愛教育が完成すると考える。